



物語をいざなう珠玉の名曲
一世紀半以上を経てなお心揺さぶる
ショパンとリストは永遠

F. ショパン：24のプレリュードより 第4番ホ短調 作品 28-4

F. Chopin : 24 Préludes No.4 en mi mineur Op.28-4

プレリュード（前奏曲）は、オペラの序曲のように大規模な楽曲のはじめに演奏される導入的なものや、即興的な作風の独立した器楽曲としても多くの作曲家が残している。この作品集は J.S. バッハの平均律クラヴィーア曲集のように、長調と短調を交互に配列された 24 のすべての調性を網羅する名作として知られる。長年にわたり断続的に書かれ、1839 年にサンドとその二人の子供とともに滞在していたマヨルカ島にて完成された。この第 4 番はパリのマドレーヌ寺院でのショパンの葬儀に際して、オルガンにて演奏されたと伝えられている。

F. ショパン：ピアノ協奏曲第 1 番ホ短調 作品 11 第 1 楽章より第 2 主題

F. Chopin : 2nd Theme from Concerto pour Piano et Orchestre No.1 en mi mineur Op.11 1mov.

ショパンは、ピアノとオーケストラの作品を数曲残しているが、協奏曲は 2 曲書かれている。第 1 番は第 2 番の翌年 1830 年（第 2 番の方が後に出版された）故国ポーランドで作曲され、同年に本人の独奏によりワルシャワで初演されている。20 歳の若さながら、その深い抒情性と華やかなパッセージによる創造性の豊かさは、後年の円

熟した書法を予感させる青年ショパンの天分が発揮された名作といえる。本日は第 1 楽章の第 2 主題を劇中で演奏。

F. ショパン：練習曲 作品 10 より 第 3 番ホ長調「別れの曲」、第 12 番ハ短調「革命」

F. Chopin : Etude Op.10 No.3 en mi majeur, No.12 en ut mineur

練習曲（我々演奏者にとってはホント嫌あ〜な響き !!）という名の作品は、数多くの作曲家によって天文学的大多数この世に存在している（ある意味大迷惑 !!）。ショパンも練習曲をそれぞれ全 12 曲からなる Op.10 と Op.25、小品 3 曲の計 27 曲残しており、1829 年頃（ポーランド）から 1936 年頃（パリ）まで断続的に書かれたとされる。練習曲といえば、まずは指を鍛えるというイメージが強く同時に音楽性をも養っていくものではあるが、ショパンの練習曲はさまざまな音楽性と表現力に対応できる柔軟なテクニックが要求されており、詩的で優れた創造性と崇高な芸術作品として世に知れわたる名作である。Op.10 はリストに、Op.25 はリストのパートナーでもあったマリー・ダグー伯爵夫人（1805-76）に献呈されている。またショパンの作品には数多くの表題が存在するが、すべてショパン自身によるものではない。「別れの曲」は 1935 年にドイツで制作されたショパンを描いた映画（フランス語版）が日本公開されたときのタイトル、「革命」はショパンがウィーンからパリに向かう途中の 1831 年、ロシア軍のワルシャワ侵攻に怒りのあまり作曲されたのはあまりに有名な逸話であるが、後にリストがこの表題を命名したとされる。

F. リスト：「リゴレット」による演奏会用パラフレーズ

F. Liszt : Konzert-Paraphrase "Rigoletto oper von Verdi"

リストは、オリジナルのピアノ作品も数多く作曲しているが、他の作曲家による歌曲や特にオペラ（リストは大変なオペラ好きであった）、それらをもとにピアノ曲としてアレンジした作品も多数残されている。この曲は、リストより 2 歳年下のイタリアのオペラ作曲家ヴェルディのオペラ「リゴレット」の終幕で歌われる主役たちの四重唱をもとにピアノ・ソロのためにアレンジ（パラフレーズ）され、ピアノの魔術師リストならではの絢爛豪華な作品といえる。

F. ショパン：バラード第 1 番ト短調 作品 23 よりコーダ

F. Chopin : Coda from Ballade No.1 en sol mineur Op.23

バラードとは、もともとは中世ヨーロッパの古い詩の様式で、その後 18 世紀末ドイツの詩人たちの活躍によって、やがては物語性をもったドイツ歌曲に発展するなど、ドイツ文学や音楽史に新たな境地を開いた。ショパンはこれらを器楽曲名として転用し、彼と同郷の詩人アダム・ミツキエヴィチの詩による物語に着想を得てバラードを 4 曲作曲している。この第 1 番はウィーンに滞在の頃から着手しはじめ 1835 年パリにて完成された。ショパンと同じ歳のシューマンは「ショパンの全作品のなかで一番好きな曲。最も彼の天才性が現れている」と絶賛している。本日は最後のコーダ部分を劇中で演奏。

F. ショパン：ポロネーズ第 6 番変イ長調 作品 53 「英雄」

F. Chopin : Polonaise No.6 en la bémol majeur Op.53 "Héroïque"

ポロネーズは、ポーランドの代表的な民俗舞曲のひとつで、ゆったりとした荘厳な音楽は宮廷で貴族たちにも踊られ、バロック時代より J.S. バッハなどが組曲などに取り入れている。自国愛の強いショパンがポロネーズを書いたことは自然なことのように思われるが、彼はそのポロネーズを独立した器楽曲としてピアノの芸術作品として発展させたといえる。タイトルの「英雄」に相応しく重厚で荘厳にさに満ちた力強い音楽ではあるが、このタイトルを誰が付けたかは不明である。

F. ショパン：ノクターン第 5 番嬰へ長調 作品 15-2

F. Chopin : Nocturne en fa dièse majeur Op.15-2

ノクターン（フランス語ではノクテュルヌ）は「夜」を意味した名称で、日本では夜想曲として親しまれている。セレナードとともにまさしく“夜の音楽”である。ショパンは生涯に 21 曲残しており、ベルカント・オペラを彷彿とさせる（ショパンもオペラ好きであった）、深い抒情性に満ちた優美な旋律と詩的な独創性の美しさ、そして時に内的な激しさをも感じられる。この第 5 番は 1833 年頃に書かれたとされる。

F. リスト：「二つの伝説」より II. 波を渡るパオラの聖フランチェスコ

F. Liszt : 《Deux légendes》II. St. François de Paule marchant sur les flots

リストが 50 歳を迎えた 1861 ~ 63 年にかけて滞在中のローマにて「二つの伝説」が作曲された。この頃のリストはカロリーヌ侯爵夫人（1819-87）との結婚計画が消滅し、また他にも心労が絶えない消沈した時期を過ごしており、「フランシスコ修道会」の創始者で小島たちに説教を行うイタリアのアッシジの聖フランチェスコ（1182-1226）と、その約 200 年後にイタリアのパオラに生まれた聖フランチェスコ（1416-1507）、この二人の偉大なる聖人の業績と信仰心に感銘を受けてそれを描写した音楽である。貧しい身なりから、イタリア本土からシチリア島に舟を出すことを船頭に拒まれたパオラの聖フランチェスコが、マントを広げそのメッシーナ海峡を渡ったとされる奇跡の逸話を重厚な荘厳さと威厳をもって書かれている。リストは交響詩を創始するなどオーケストラ作品も多く、この作品のオーケストラ版も存在している。なお、この作品は、後にワーグナー夫人となるリストの次女コジマに献呈されている。

F. リスト：愛の夢第 3 番 変イ長調 （3つの夜想曲 第 3 番）

F. Liszt : Liebes Träume Nr.3 As-Dur (Tre Notturmi No.3)

リストが作曲した歌曲より本人が 3 曲を選び、それをピアノ曲にアレンジしたものである。3 つのノクターン（夜想曲）としても知られ 1850 年頃に書かれた。この第 3 番はフェルディナント・フライリヒャートの詩「愛し得る限り愛しなさい」を彷彿とする甘く官能的な旋律と華やかなパッセージに、原曲の歌曲をも凌ぐ人気の高い名作といえる。また、リストはこの時期にワーグナーのオペラ「ローエングリン」世界初演の指揮を行っている。

（稲垣聡）

